

百足塚古墳出土形象埴輪特別公開展記念講演会

むかでづか

はにわ

百足塚古墳の埴輪とその意味

講演資料



2002. 12. 15

於：新富町文化会館イベントホール

新富町・新富町教育委員会

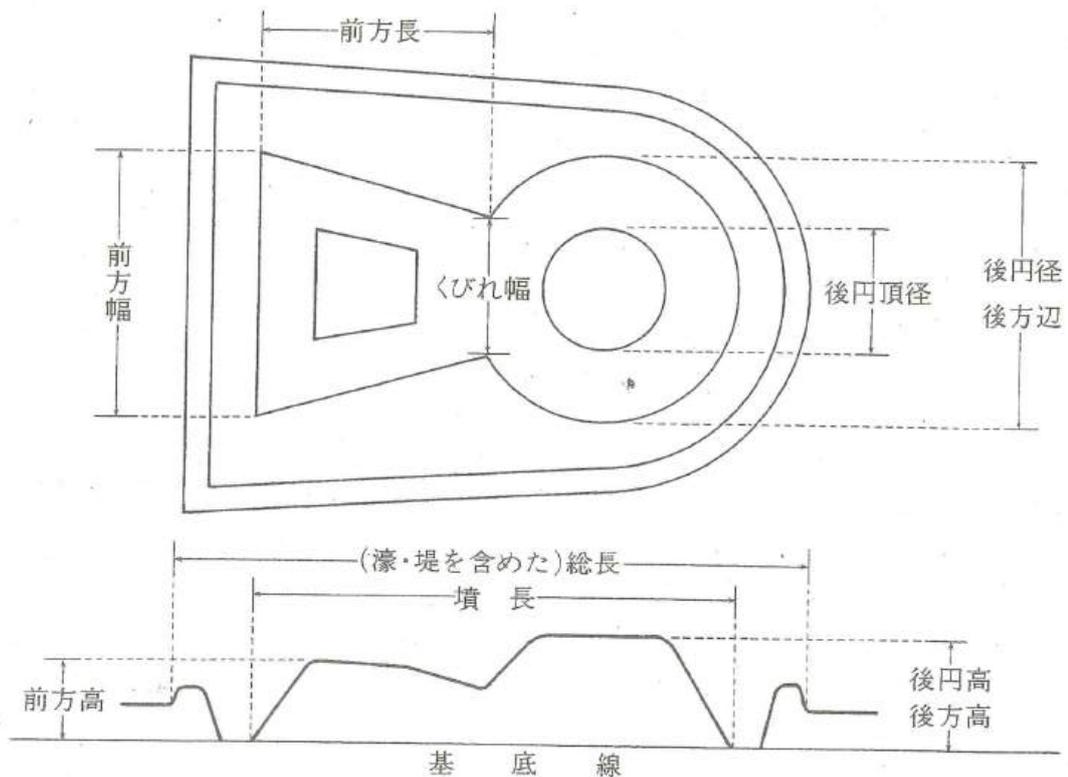
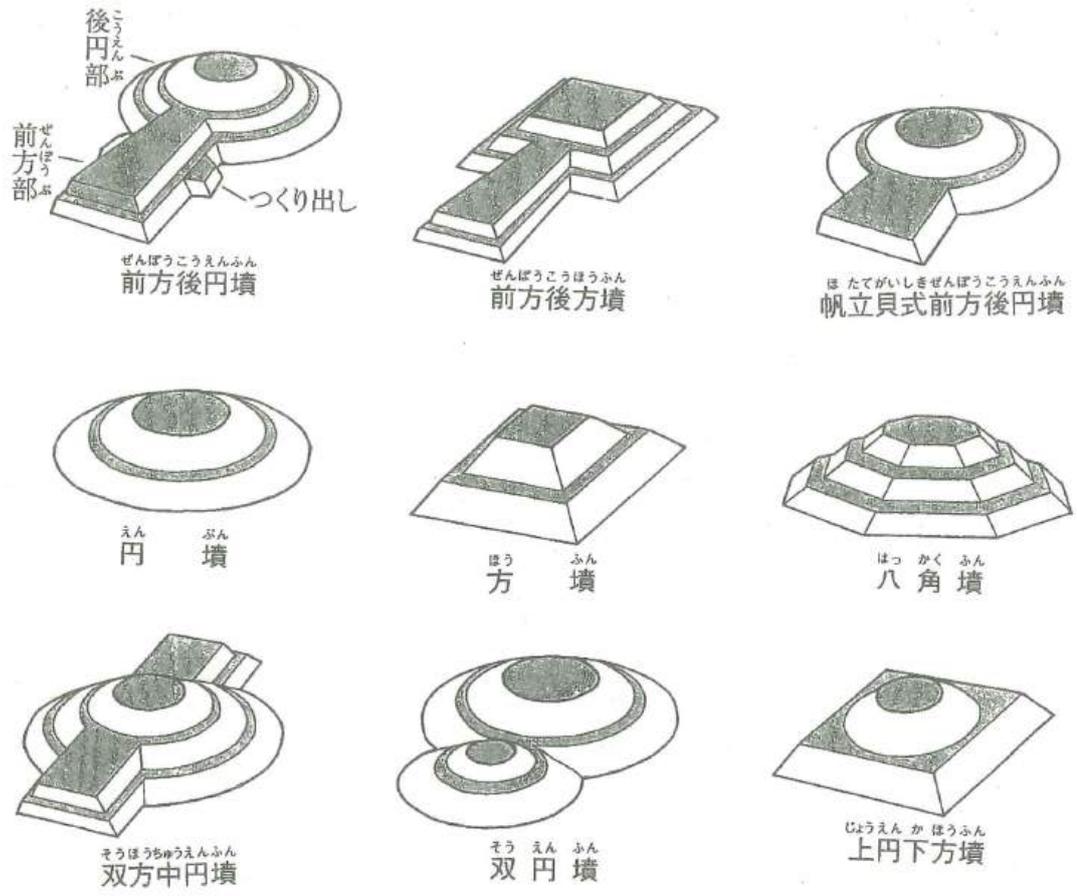


図1 古墳のかたちと各部名称

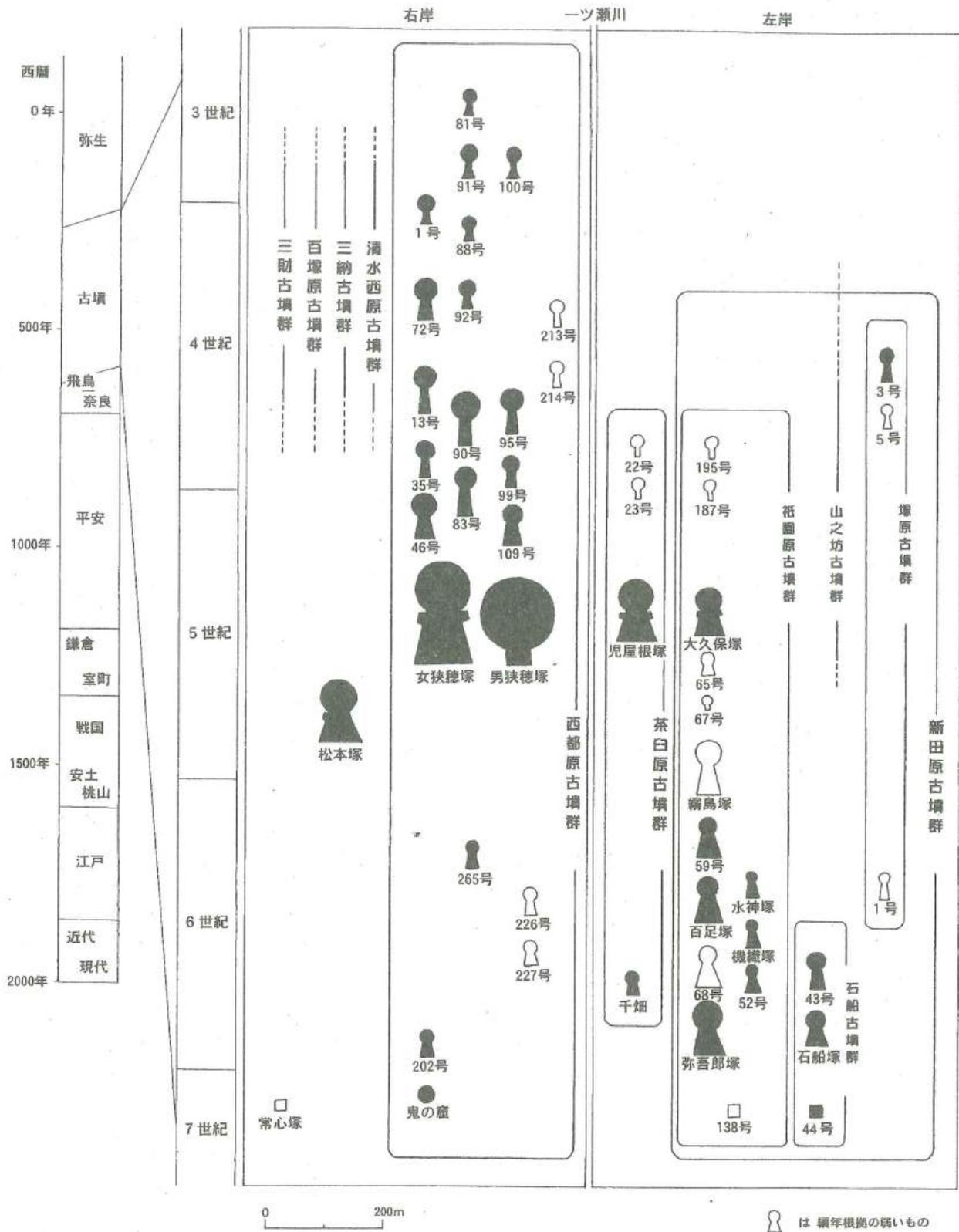


図2 一ツ瀬川流域の主要古墳の編年(柳沢1999に加筆)

一ツ瀬川流域の古墳のうち首長の墓とされる前方後円墳は約70基あります。これらの古墳は墳形や出土遺物から造られた時期を推定すると上の図のように並びます。この図によると西都原古墳群では4世紀から5世紀(古墳時代前期~中期)、「新田原古墳群」では5世紀から6世紀(古墳時代中期から後期)に前方後円墳の規模が大きくなったり、数が増えたりすることがわかります。

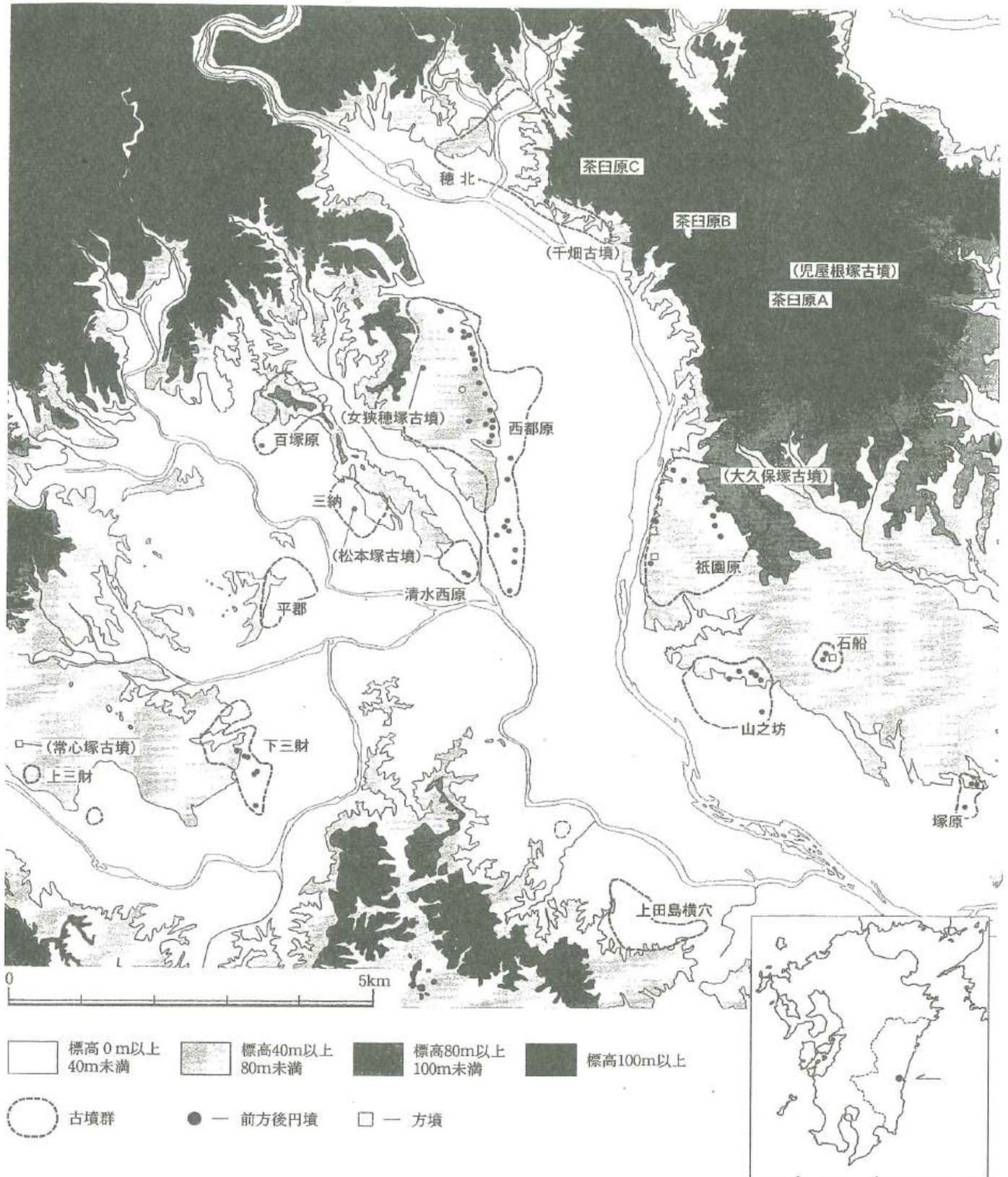


図3 一ツ瀬川流域の古墳群分布

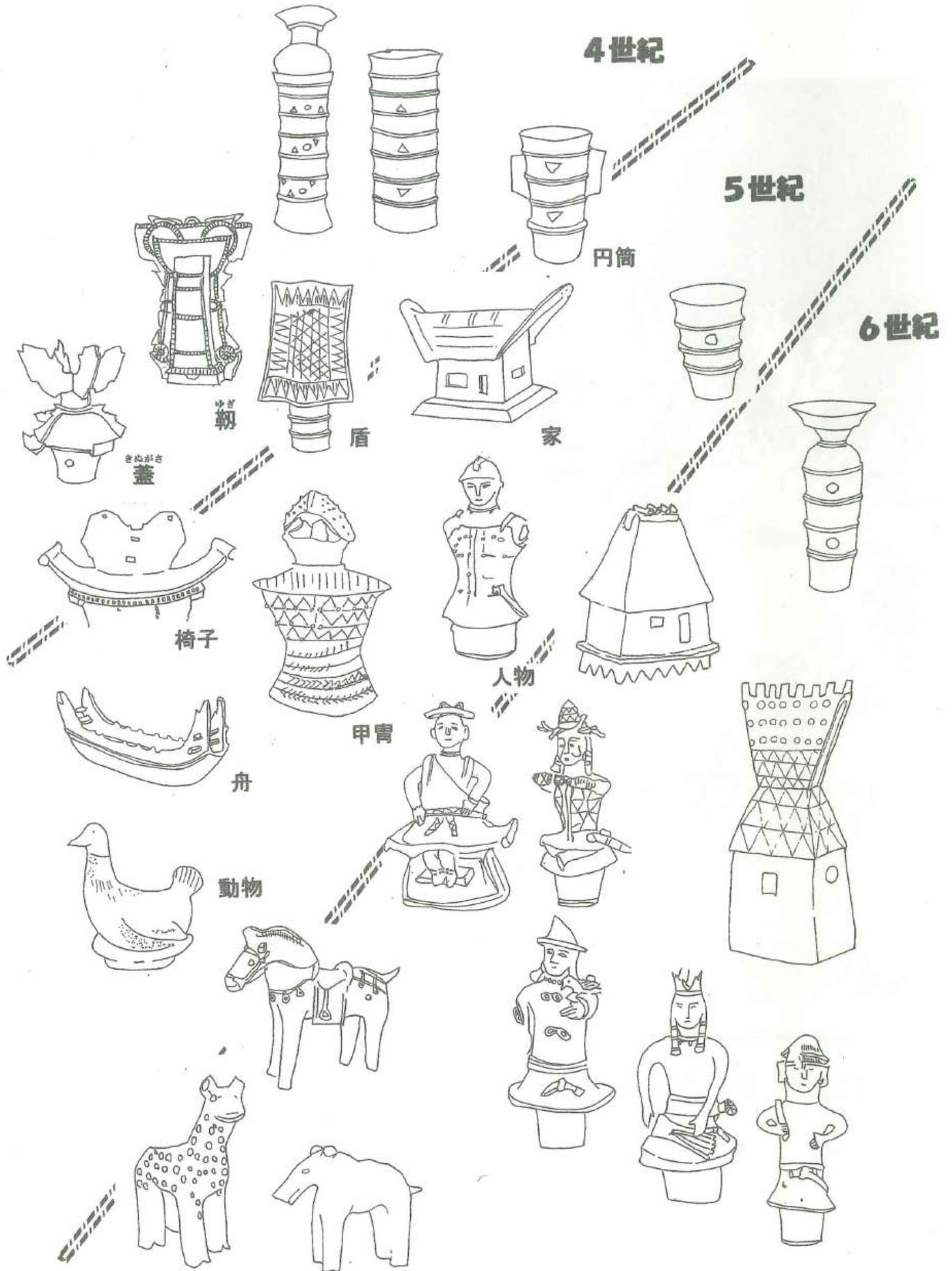


図4 埴輪の種類と変化

百足塚古墳の調査

新富町教育委員会
有馬 義人

(1) 新田原古墳群と祇園原古墳群

新田原古墳群は一ツ瀬川左岸台地上にある国指定史跡である。昭和 19 年に当時の新田村にあった古墳すべてが指定史跡となったが、実際には4つの大きな古墳群に分けることができるため、それぞれ塚原・石船・山之坊・祇園原古墳群と呼んでいる。

祇園原古墳群には 154 基の古墳があり、その構成は前方後円墳 14 基・円墳 139 基・方墳 1 基である。分布のまとまりで大きく4つの群に分けることができ、それぞれ A～D 群としている。前方後円墳の築造は古墳時代前期後半に A 群の北西部で始まり、中期には女狭穂塚古墳と同時期の大久保塚古墳が造られるが、多くは後期に築造されたと推測される。

A 群の前方後円墳群は墳長 80 m 内外の大型墳(弥吾郎塚・百足塚・59 号墳)と同じく 50 m 内外の中型墳(水神塚・機織塚・52 号墳)があり、両者は同時期に継続して築造しているため、大形円墳を含めた階層構成型の群構造を呈しているものと推測できる。日向地方では後期最大の首長墓群である。

また同古墳群では埴輪を採用した古墳が多く確認でき、現在のところ前方後円墳 5 基、円墳 3 基で埴輪片が表面採取できる。中期の大久保塚古墳を除けば、すべて後期に該当し、日向地方における古墳時代後期最大の埴輪消費地であったと考えられる。

(2) 百足塚古墳の概要

東から西への緩い傾斜面に立地する 2 段築成の前方後円墳で、盾形の周溝を有する。外堤も周溝に沿うように全周する可能性ある。墳長は約 80 m で、外堤までを含めた全長は 120 m に達する。葺石はないが、テラスと墳頂部に円筒埴輪列を樹立している。

発掘調査前の現存する墳丘部の計測地は次のとおりである。墳長 76.4 m、後円部径 32 m、同高さ 8.8 m、前方部幅 43.6 m、同高さ 8.4 m、クビレ幅 38 m。前方部はほぼ正南方向に向けて造られている。

① 墳丘端部

戦前からの畑地造成によって大きく掘削されており、1 段目の斜面は急崖をなしている箇所が多い。したがって正確な墳長は求められず、墳丘の傾斜角と周溝内の傾斜面から想定して墳丘長約 80 m であるとした。

② 墳頂部

戦時中に山茶栽培を行っていたらしく掘削が及んでおり、後円部・前方部ともに円筒埴輪の基底部片が幾つか検出できる程度だったが、クビレ部近くの墳頂部で原位置の円筒埴輪が 2 箇所検出できた。実際 2 段目斜面の埋土からは多数の円筒埴輪片が検出できるため、墳頂部にも円筒埴輪列が存在したと思われる。一方形象埴輪は墳頂から 2 段目に及ぶ埋土から 1 片も検出できていないため、墳頂部には形象埴輪は樹立していなかった可能性が高い。また盛土を精査したが、墳頂部には今のところ 2 次的な埋葬施設などは発見されていない。

③ テラス

後円部の北側と西側で広く前方部で狭い傾向にあるが、いずれにおいても円筒埴輪列が確認できる。特に墳丘の北側から東側では遺存状態がよく、東側クビレ部付近では円筒埴輪の 2 段目までが原位置で発見されている。

百足塚古墳 ②

④埋葬施設

後円部西側クビレ部に近い位置で、1段目の斜面に横穴式石室の前庭部^{ぜんていぶ}が見つかっている。羨門部は礫で封鎖していることが分かっている。後円部中心から西側クビレ部付近に開口するものと考えられる。

⑤周溝

調査前から東側にその痕跡を明瞭に残し、西側と北側・南側は調査によって発見できた。その掘り方は不均一で、墳丘に近い部分が深く掘りこまれ、再度掘った土地を均一にしながら底部を整地したようだ。周溝の後円部西側には外堤から墳丘に進入するための陸橋が確認できるが、墳丘に近い部分は畑地耕作によって削平されているため復元が困難である。

⑥外堤

外堤は西側では幅約6mと想定できるが、上面が削平されているため盛土があったかどうか分からない。外堤の外側には浅くて幅の狭い外周溝が巡ることが部分的に確認できる。

西側外堤周辺で形象埴輪片が大量に出土している。その範囲は陸橋周辺から南へ40m続くが、南から北へいくほど閑散としている。

外側に幅が狭く浅い外周溝^{がいしゅうこう}が部分的に確認できる。外堤上に土盛りがあったかどうか分からない。

(3) 出土した埴輪の種類と数

円筒埴輪は1m幅の部分調査でテラス端部に並ぶ底部径約20cmの個体が4本検出でき、墳頂部・テラス・外堤でその樹立が確認できることから、百足塚古墳だけで約1,000本の円筒埴輪が樹立されていたと予想できる。出土した円筒埴輪はすべて4条突帯5段構成であり、ほぼ均一なものである。朝顔形円筒埴輪も確認できる。

形象埴輪の多くは西側外堤の周辺から出土している。その出土範囲は陸橋部周辺から南へ約40mであり、もともと外堤上に立ててあった埴輪群が周囲へ転落したものである。今後、検出された埴輪片の位置を細かく検討すれば、おおよそその外堤条での樹立位置が復元できるものと想定される。

テラス面と第1段斜面からは盾形埴輪が4体出土しており、今のところ墳丘部で出土する形象埴輪は盾だけである。また西側外堤の形象埴輪群とは離れて、南西側外堤隅角付近と北西側外堤付近では盾持ち人形埴輪が単独で出土している。それぞれ形象埴輪群とはちがった期待をもって立てられたのだろう。

出土した形象埴輪は、家6、盾4、柵13、大刀1、太鼓?1、鶏5、馬2、鹿1、動物2、人物女性4、人物男性14、盾持ち人2の総数55個体を数える。

人物男性には座った姿勢や跪く姿勢、あるいは力士や武人の姿が確認でき、人物女性には器を捧げる姿勢や、踊る姿勢のものがある。

(4) まとめ

形象埴輪群のおおまかな出土位置の傾向を見ると、南側から「人物群+建物群」に始まり、北側の「人物群+動物群」に変化していることが予想される。今後整理復元作業と同時に他地域の埴輪出土事例と比較することによって、百足塚古墳における形象埴輪群の様相を明らかにしたい。

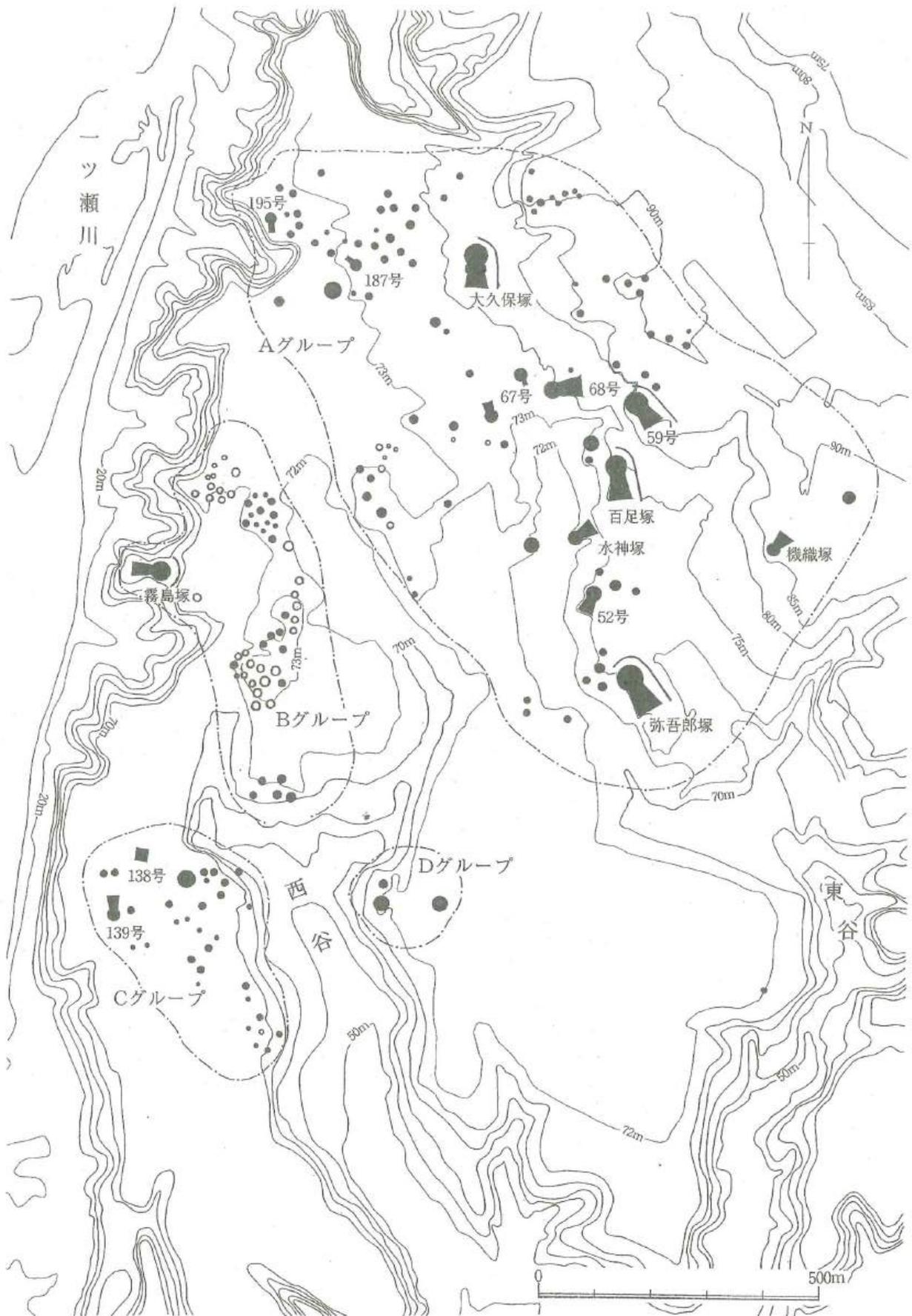


図1 祇園原古墳群の古墳分布(1/10,000)

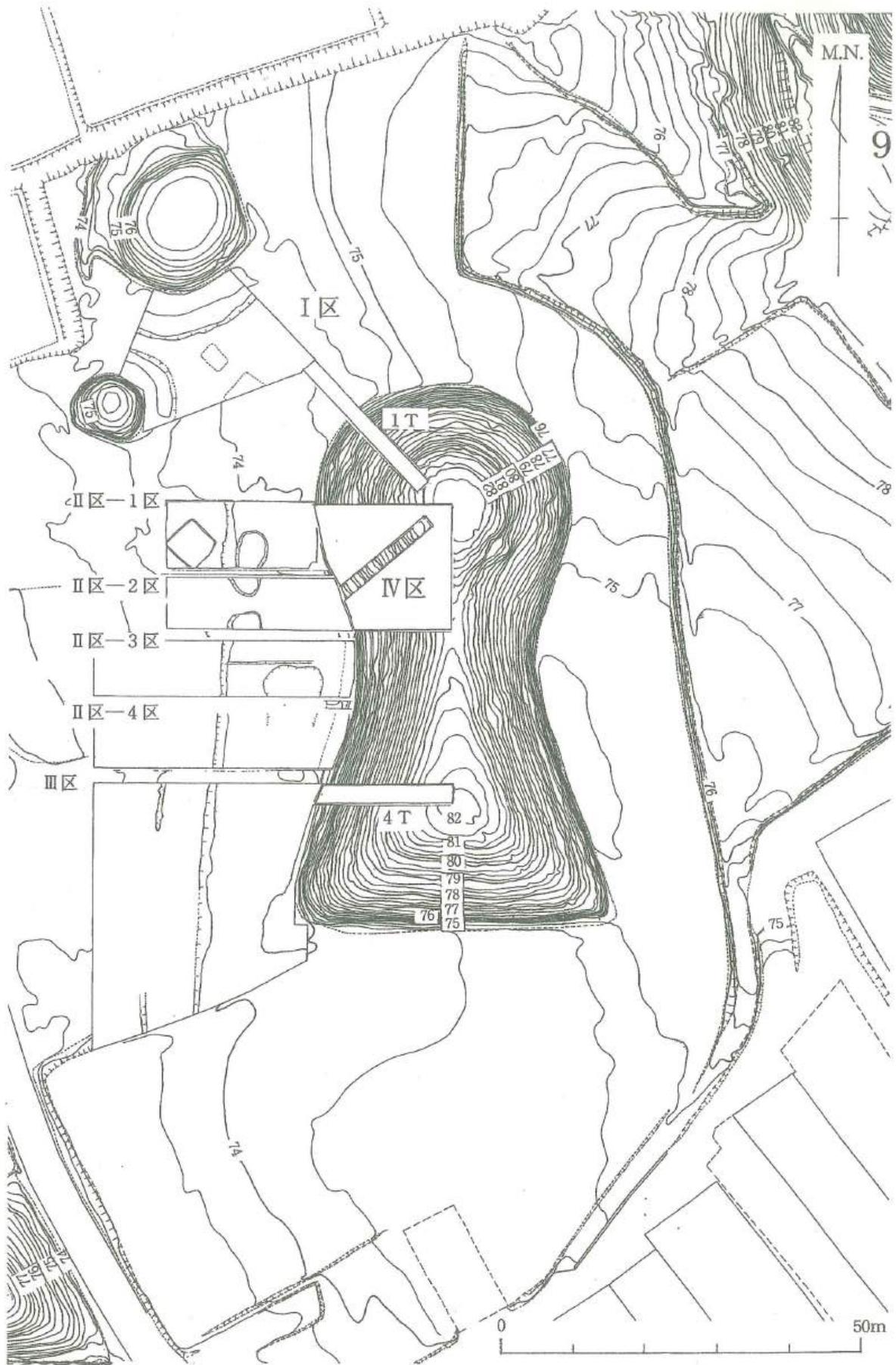


图2 百足塚古墳

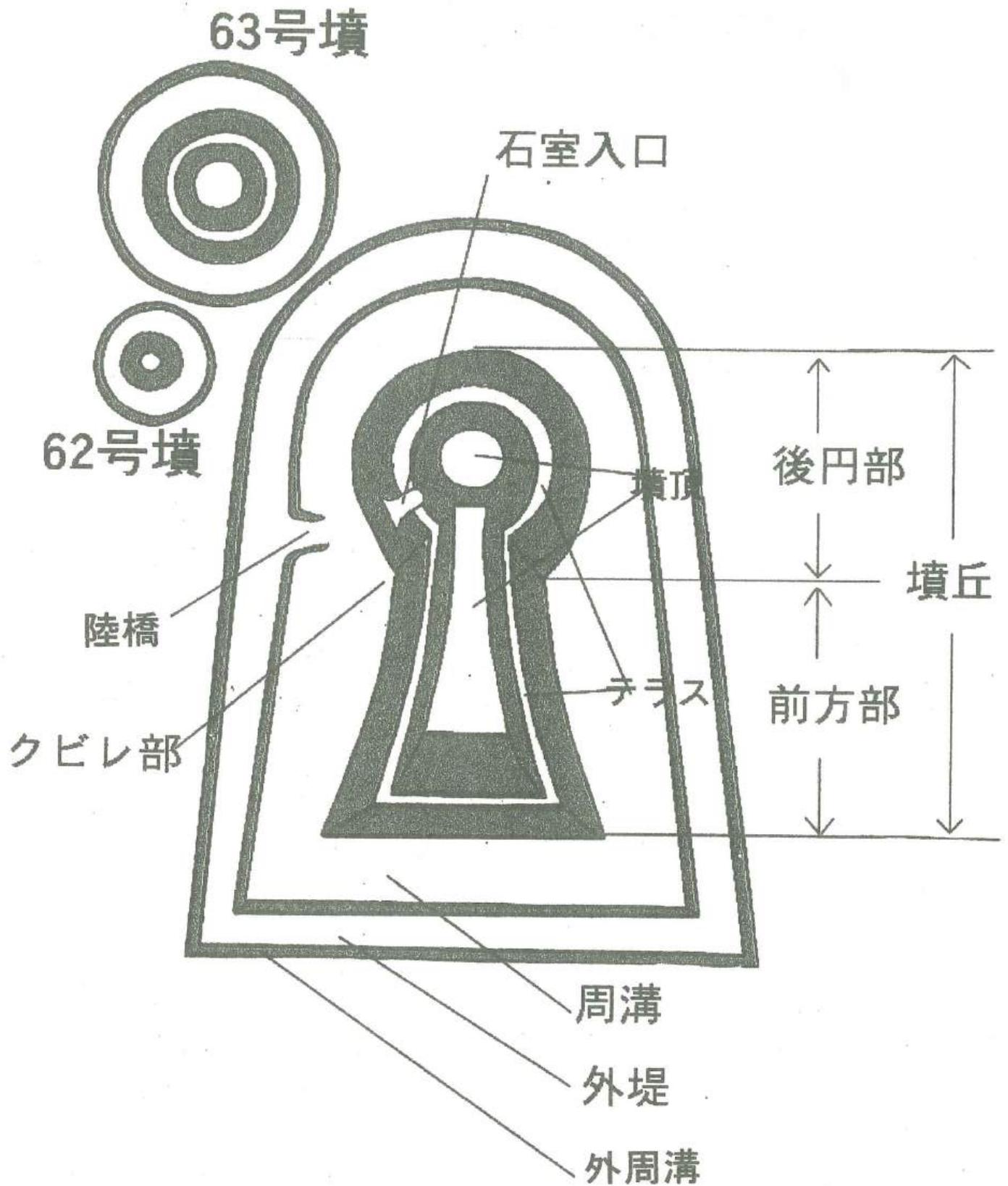


図3 百足塚古墳の復元想像図 と各部名称

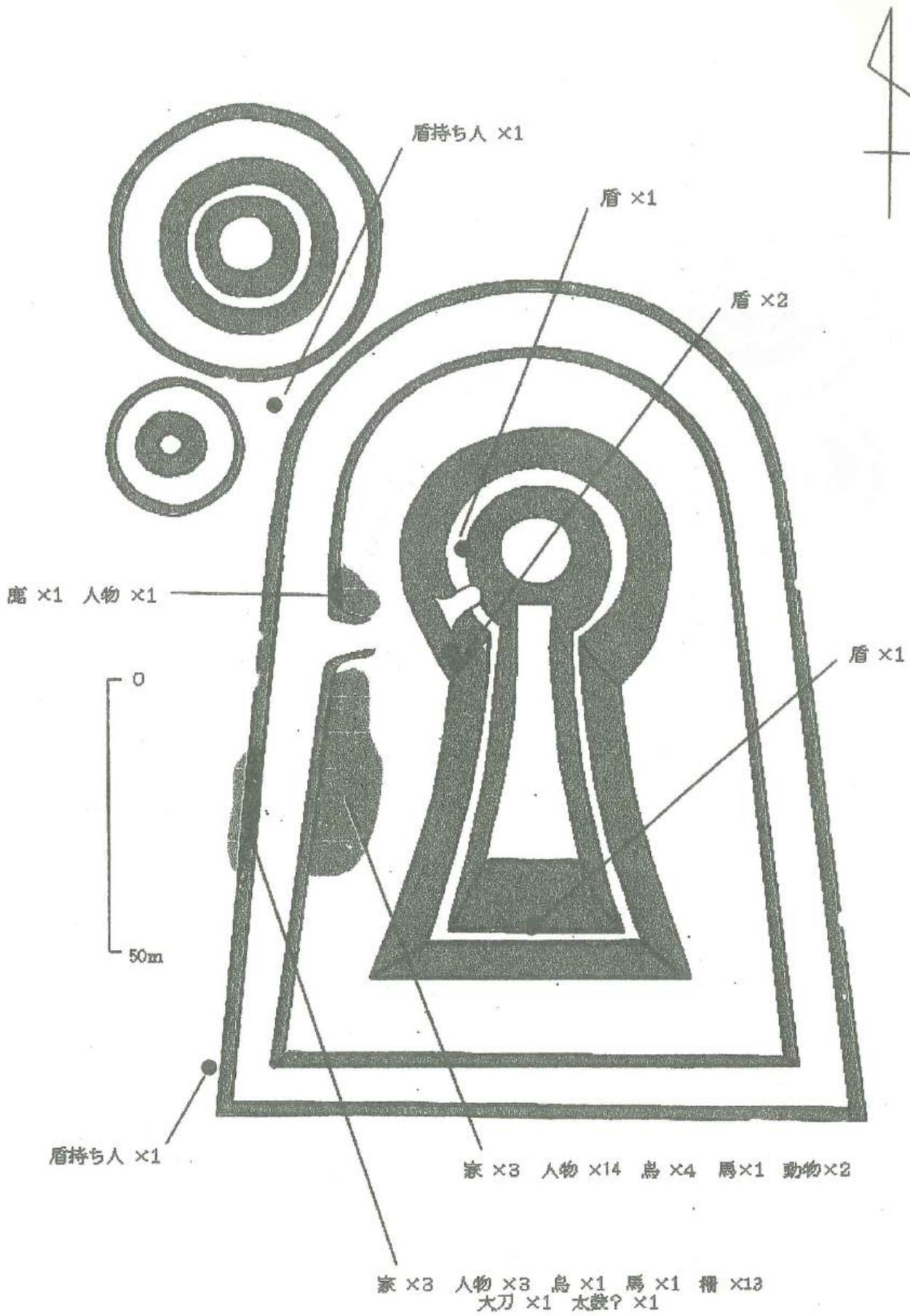


図4 形象埴輪の出土位置

西都原171号墳の調査

宮崎県教育庁文化課

松林豊樹

(1) 西都原古墳群と171号墳

西都原古墳群とは、一ツ瀬川右岸の標高 60 mの台地上から中位段丘面に点在する 311 基の古墳の総称である。古墳時代前期から終末期の古墳が群集しており、その内訳は前方後円墳 31 基・円墳 279 基・方墳 1 基である。

特に古墳時代前期に前方後円墳の築造が多く、少なくとも 5～6 つの首長墓系譜（同じ系列の首長達がつくった墓群＝多くは前方後円墳）が台地上を共同の墓域にしていたと考えられる。

ところが、中期前半になると台地中央部に女狭穂塚古墳・男狭穂塚古墳の大形墳が登場し、前期から続いていた首長墓群は築造を中断したようだ。これら大形墳を造った強大な権力を持つ首長の登場によって、それまでいた小首長達は一斉に没落したか、あるいは小首長達の推挙によって、一人の大首長が誕生したと想像される。

円筒埴輪・形象埴輪といった全国共通の埴輪が日向地方で初めて古墳に樹立されたのも女狭穂塚古墳・男狭穂塚古墳であり、その製作にあたっては畿内の埴輪製作工人が派遣された可能性が高い。

171 号墳は女狭穂塚古墳の南東側にあり、同古墳と同じ時期に築造された陪塚（ばいづか）であると考えられる。西都原古墳群唯一の方墳である。

(2) 171号墳の調査歴

西都原古墳群は大正 4 年から 6 次にわたり東京大学・京都大学などの研究者によって 30 基の古墳が調査されている。全国で初めての本格的な古墳の学術調査であった。

171 号墳では上記の大正の調査（第 1 次）と平成 10 年度から始まった史跡整備にともなう調査（第 2 次）の計 2 回にわたる発掘調査が行われている。

第 1 次調査 期 間：大正元年 12 月 27～大正 2 年 1 月 4 日

調査担当：京都帝国大学講師 濱田耕作・東京帝国大学助手 柴田常恵

調査内容：各段の円筒埴輪列を検出し、墳頂部の形象埴輪群を確認。

内部主体は発見されなかった（盗掘の可能性を指摘）。

平成 5 年度には高橋克壽によって出土した形象埴輪が紹介され初めて出土した形象埴輪の内容が明らかになった。

第 2 次調査 期 間：平成 10 年～12 年

調査主体：宮崎県教育庁文化課 松林豊樹（平成 10・11 年）

高橋 誠（平成 12 年）

調査内容：墳丘全体を調査し、1 段目と 2 段目の斜面にある墓石をすべて検出した。

1 次調査で検出されていた円筒埴輪列を再度検出し、墳頂部や斜面に残された形象埴輪片をすべて採集する。

一部で周溝も確認できたが比較的浅い。

平成 12 年度には墳丘復元を行った。

(3) 古墳の概要

①墳丘の形状と外表施設

2段築成の方墳である。1次調査では墳丘端部の確認は行われていないが、調査前には南西側が畑地耕作によって1.8mほど掘削されていたため、その当時における墳丘の遺存規模は南北約23m・東西約20mであった。2次調査で墳端確認を行ったところ、南西側で葺石の根石列が検出できたが、正確な測定は困難であるため1辺約25mの正方形であると考えている。

各段の高さは、1段目が約1m、2段目が3m以上で、墳丘高は約4.5mである。1段目のほとんどは地山成形であり、2段目はアカホヤや黒褐色、暗褐色土ブロックを含む黒色土で盛土されている。

テラスは幅約1mで、その端部に円筒埴輪列が樹立されていた。墳頂部は1辺約9mで各辺端部に円筒埴輪列が樹立されている。円筒埴輪列が囲う平坦面内部には1次調査で形象埴輪が樹立されていたことが判明している。

周溝は南西側で幅約4m、深さ約60cmであり、南東側へ巡るが、北東側・北西側の状況は不明である。

②葺石

各段の斜面に遺存していたが、1段目では遺存状態が悪かった。2段目葺石の最下段には横長な石が列をなして置かれた「根石」が良好な状態で検出できた。斜面にはそこから縦方向に約1m間隔で区画石が置かれ、その区画を埋めるように葺石が差し込まれている。

根石や区画に用いた石は約30～50cmと大きく、区画を埋める石は10～20cmと小さい。各段とも上端部の遺存状態は悪く、多くが転落していた。

③出土した埴輪の種類と数

2次調査によって、墳頂部とテラス面から出土した円筒埴輪は合計125本である。大きさには大・小あり、小形の円筒が多数を占める。1次調査では各辺の円筒埴輪列の中央部には大形の円筒を樹立したのではないかと予想されており、2次調査では円筒埴輪の上部に載せていた壺形埴輪は8体以上発見されている。

形象埴輪の多くは1次調査で発見されており、2次調査で甲冑埴輪の基底部が発見されている。これまで確認されている種類と数は、家2、甲冑2、盾1、蓋3以上である。

1次調査で記録された配置状況によると、墳頂部のやや南側に家形埴輪があり、その周囲に盾・甲冑があり、蓋形埴輪はやや外よりであった可能性が高い。

(4) まとめ

西都原171号墳は古墳時代中期前葉に築造された方墳であり、その形象埴輪のセット関係は器財埴輪が中心である。

2次調査で同墳に樹立されたほぼすべての埴輪が検出され、今後の整理作業によって同古墳で行われた埴輪祭祀の実態が判明する。このことは中期の埴輪祭祀を研究する上で意義深い。また同古墳は、日向地方の古墳築造に際して埴輪が導入される契機となったと考えられることから、日向地方における埴輪の導入と展開を研究する上でも重要である。今後も細心の注意をはらいながら作業を続けていきたい。



図2 女狭穂塚古墳と171号墳

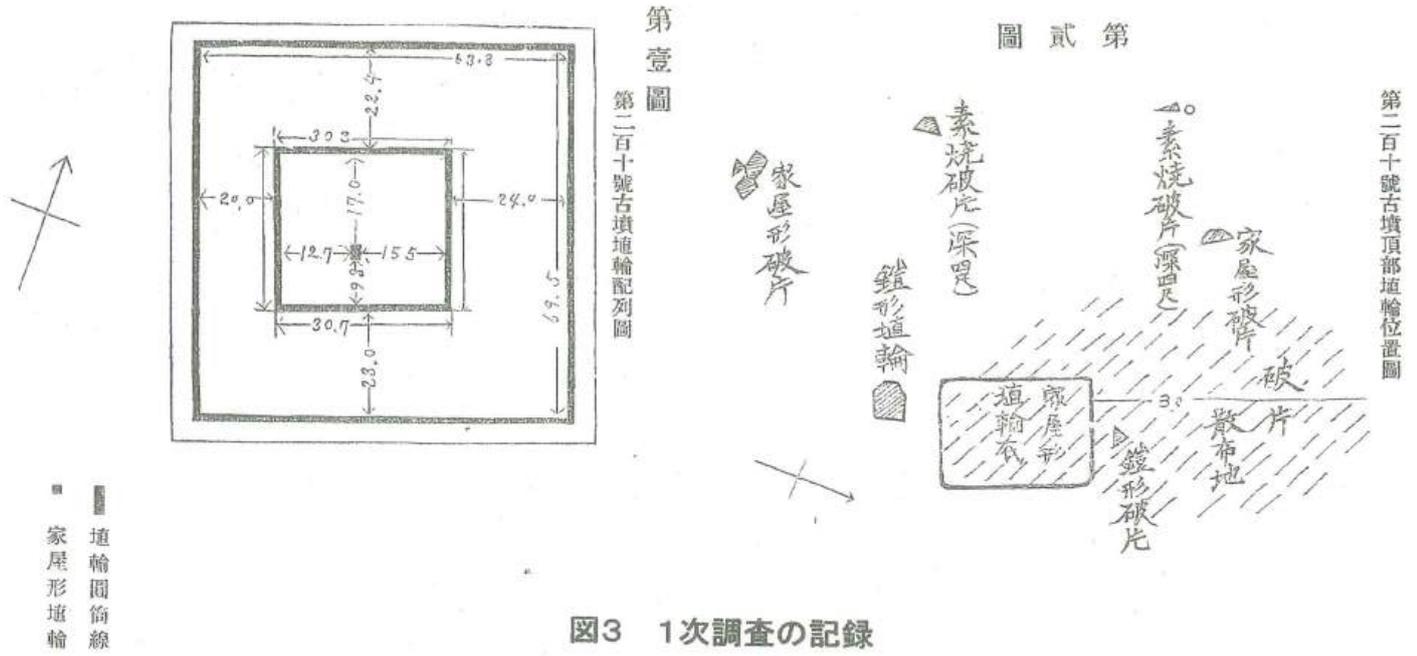


図3 1次調査の記録

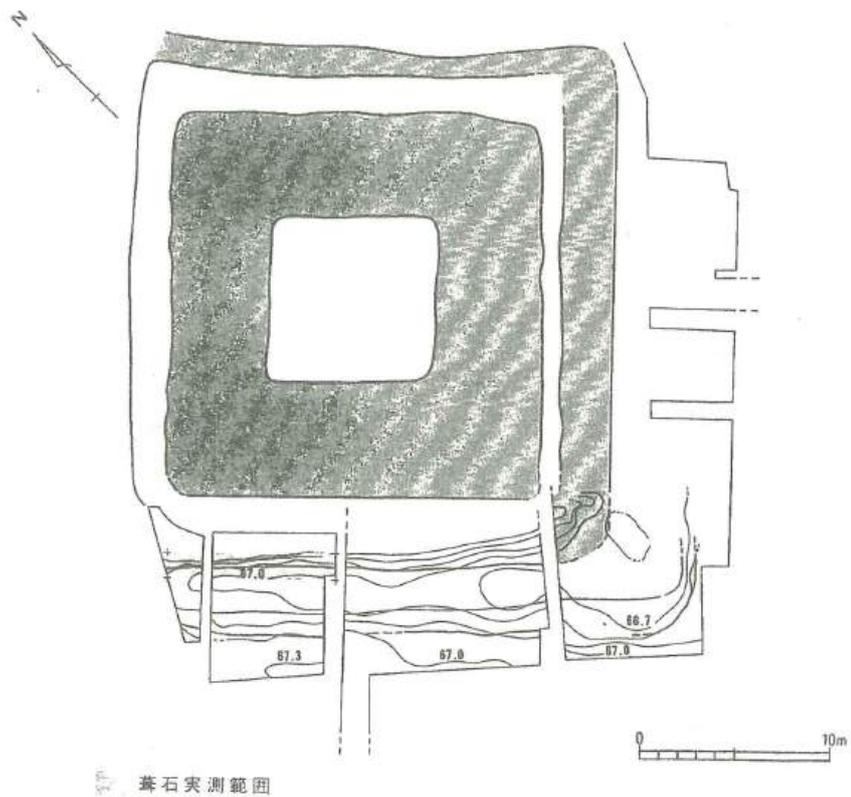


図4 2次調査

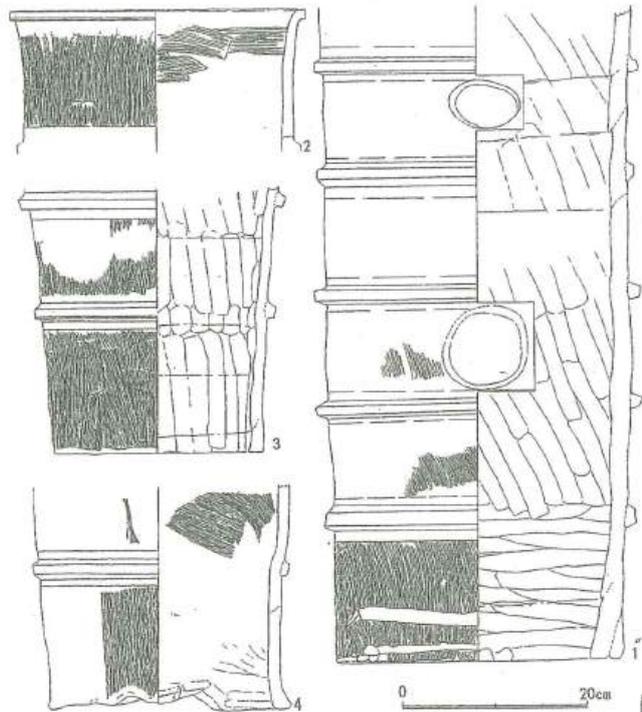
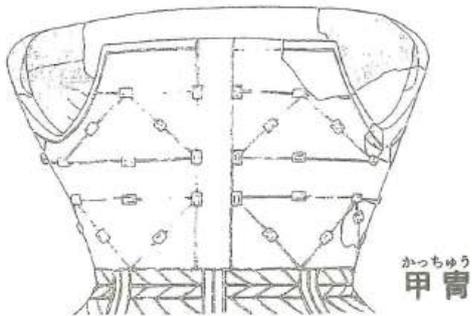
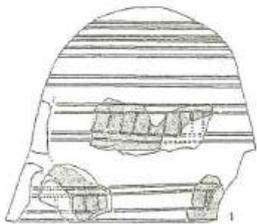
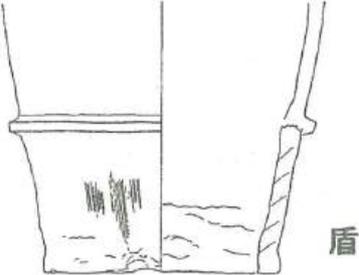
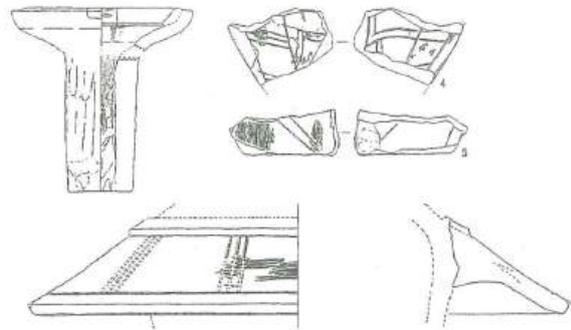
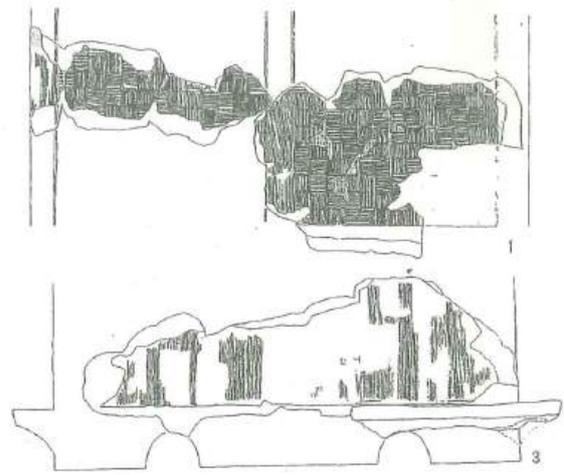
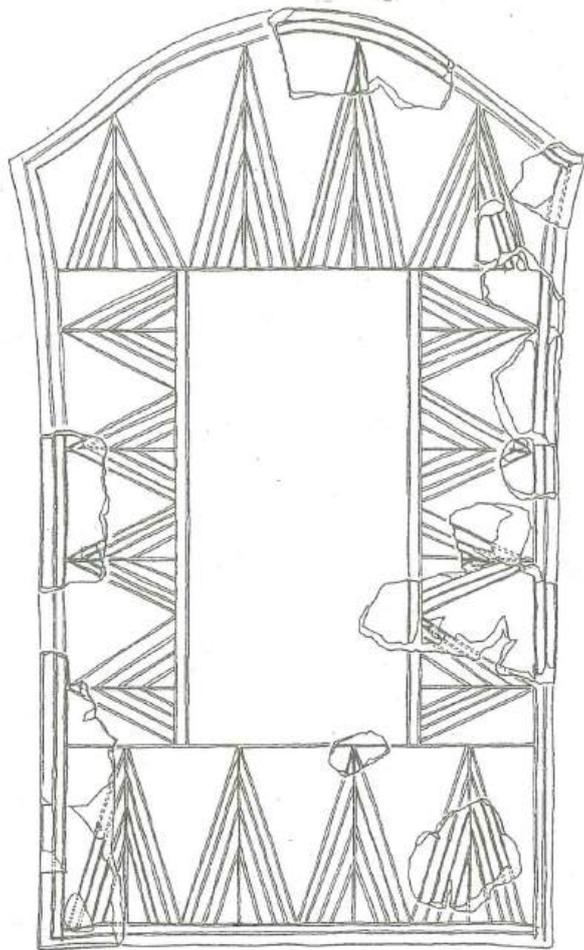


図5 171号墳出土埴輪実測図

埴輪群像の意味を考える

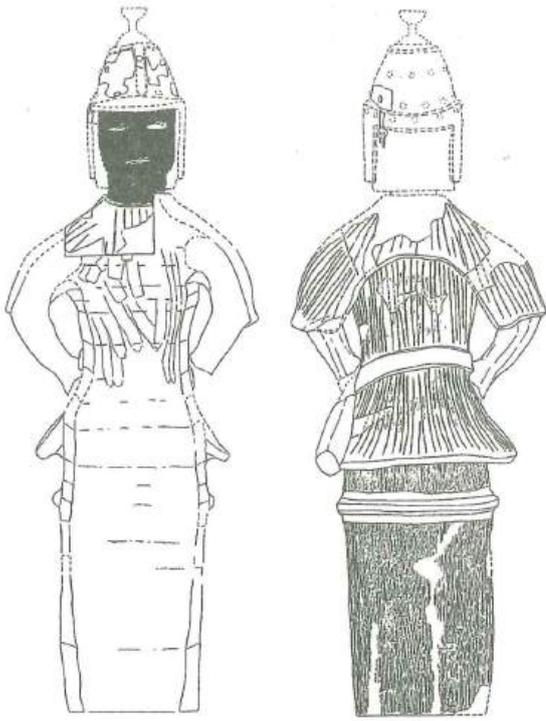
日 高 慎

(筑波大学文部科学技官)

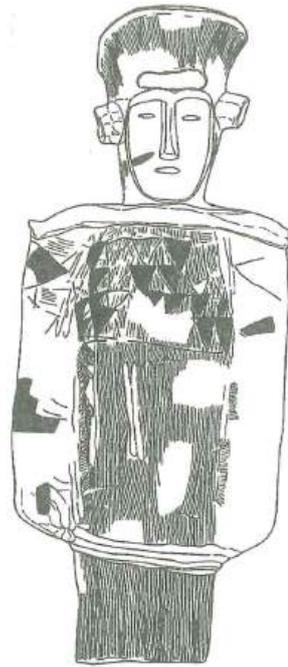
1. はじめに
2. 埴輪の種類と変遷
3. 埴輪がどう立てられていたか
4. 埴輪が表す場面とは
5. 埴輪群像の意味
6. おわりに

	墳頂部方形区画	くびれ部・造り出し部	周濠部・墳丘外部	その他
1				凡例 ■ 器台・土器形埴輪 ▲ 動物・人物埴輪 × 器財形埴輪
2				
3				
4				

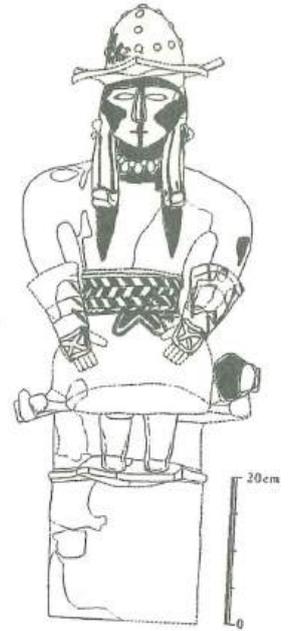
図1 坂靖氏による埴輪配列の変遷



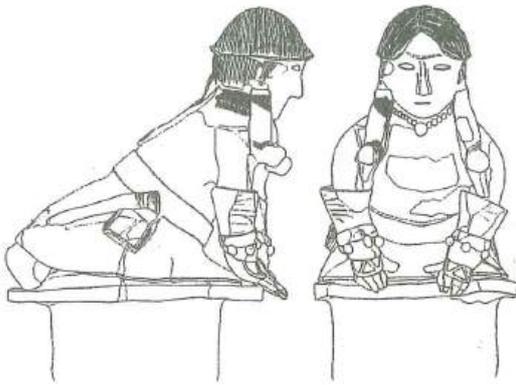
武装男子(保渡田Ⅶ)



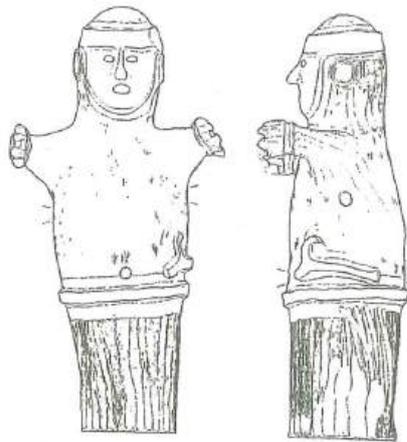
盾持ち人(竜角寺 101号)



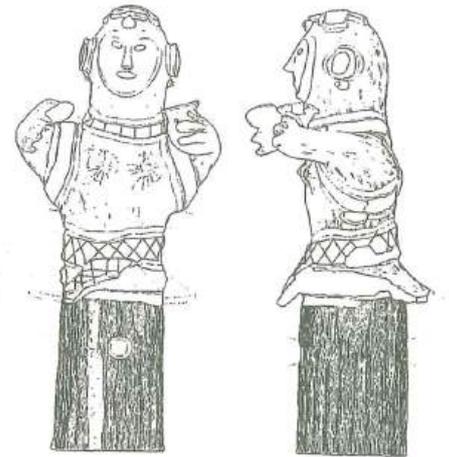
男子(塚廻り3号)



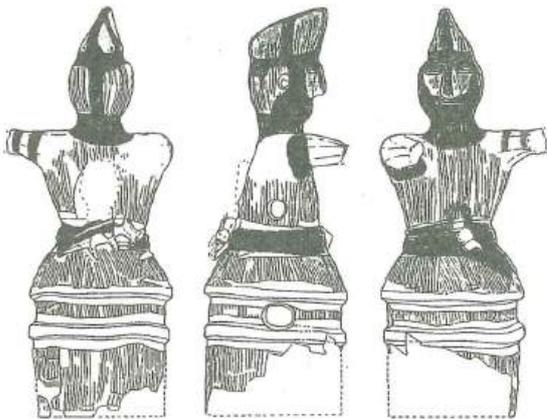
男子(塚廻り4号)



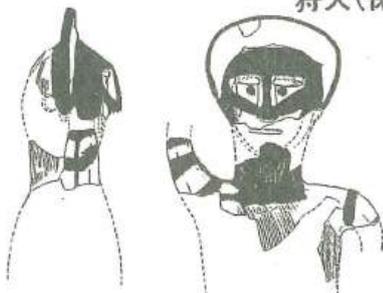
男子(正福寺1号)



女子(正福寺1号)



狩人(保渡田Ⅶ)

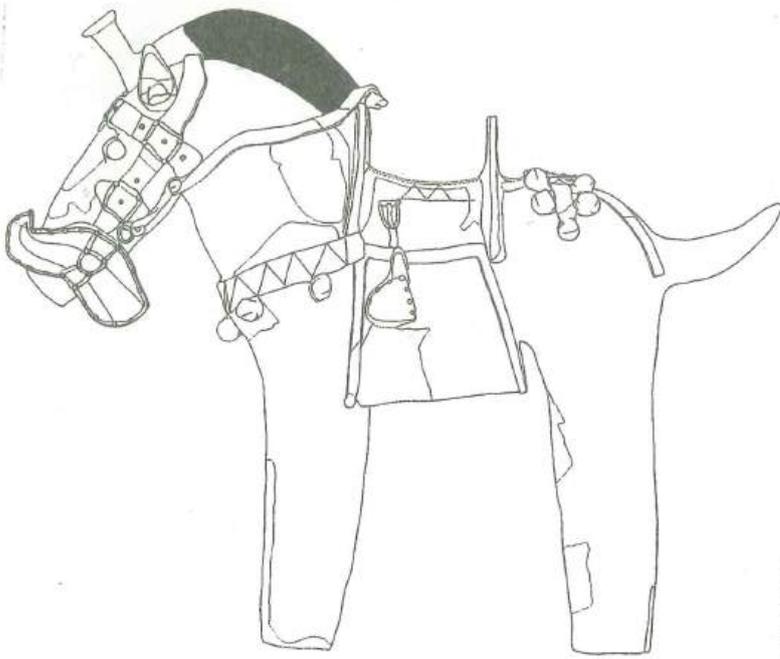


女子(塚廻り3号)



女子(塚廻り4号)

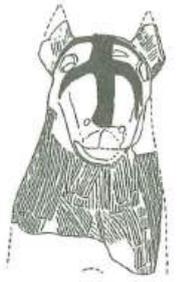




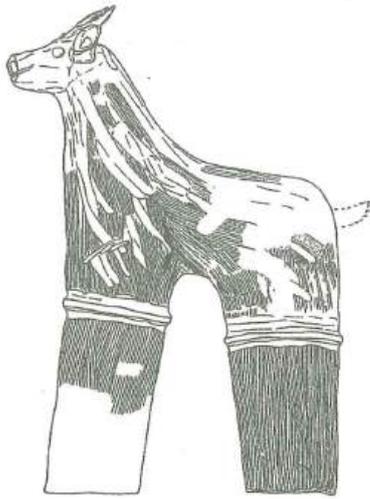
馬(塚廻り4号)



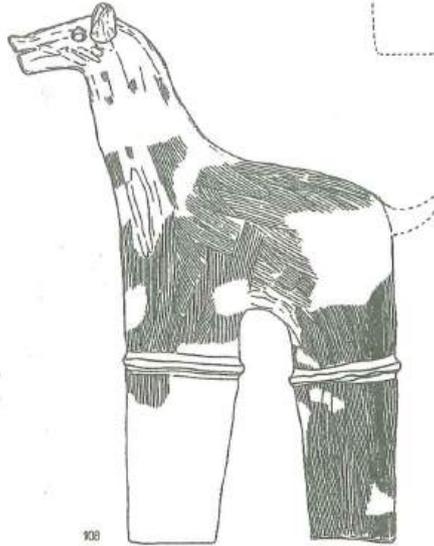
犬(保渡田VII)



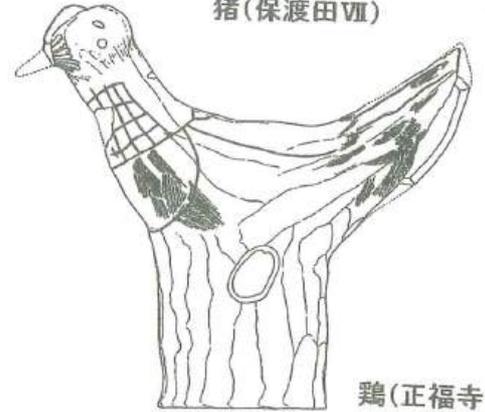
猪(保渡田VII)



鹿(竜角寺 101号)



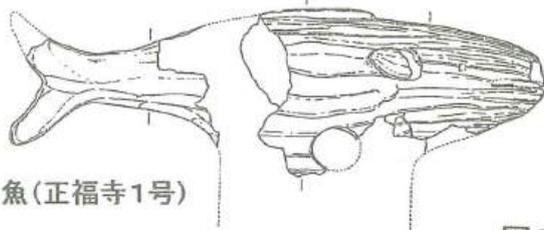
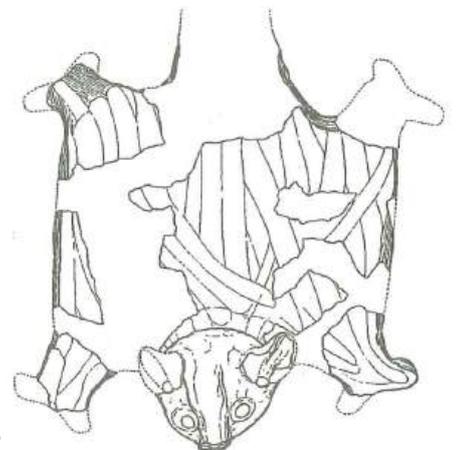
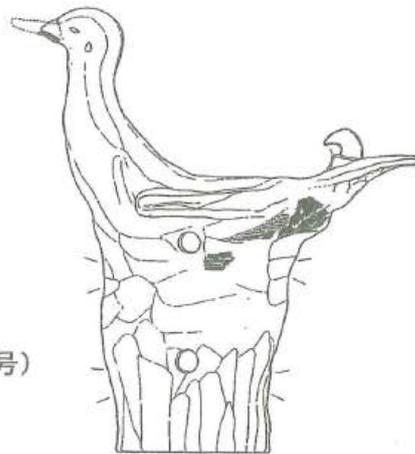
犬(竜角寺 101号)



鶏(正福寺1号)



水鳥(正福寺1号)



魚(正福寺1号)

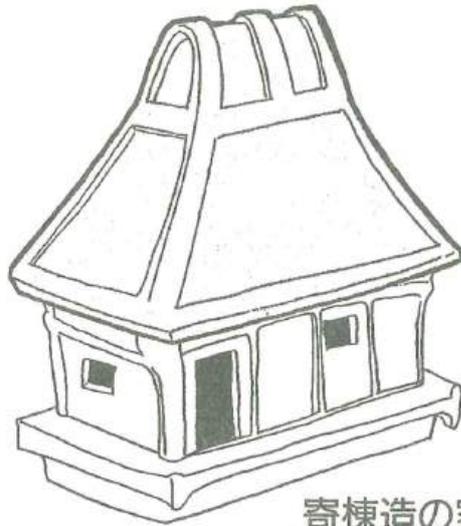


ムササビ(正福寺1号)

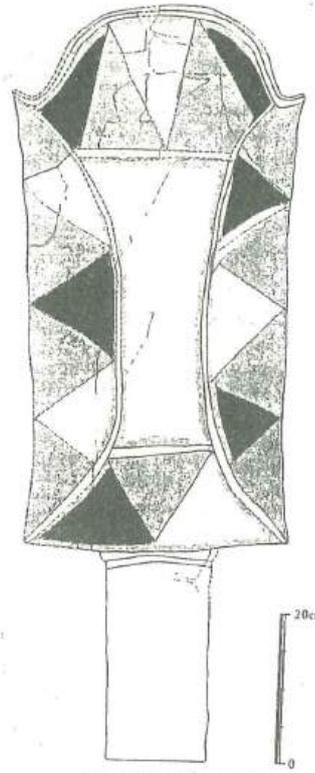
埴輪群像の意味を考える ④



入母屋造の家



寄棟造の家

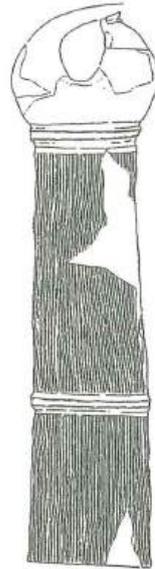


盾(塚廻り3号)



切妻造の家

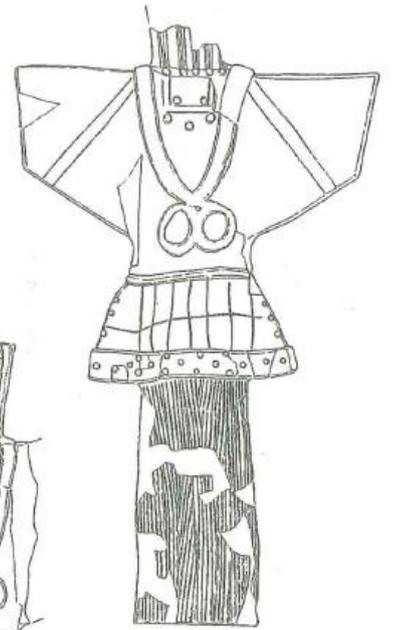
家は縮尺不同



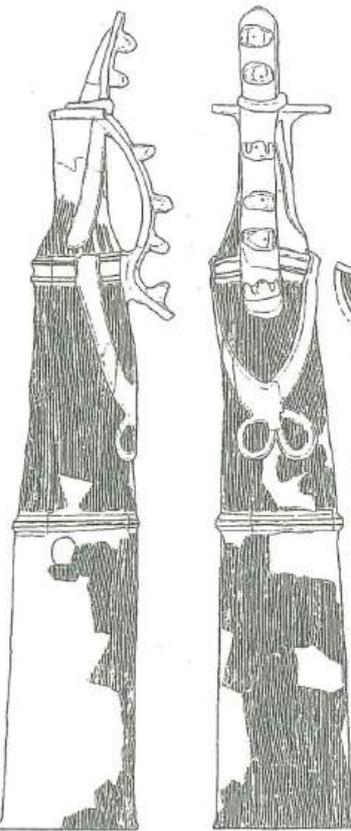
轆(平井1号)



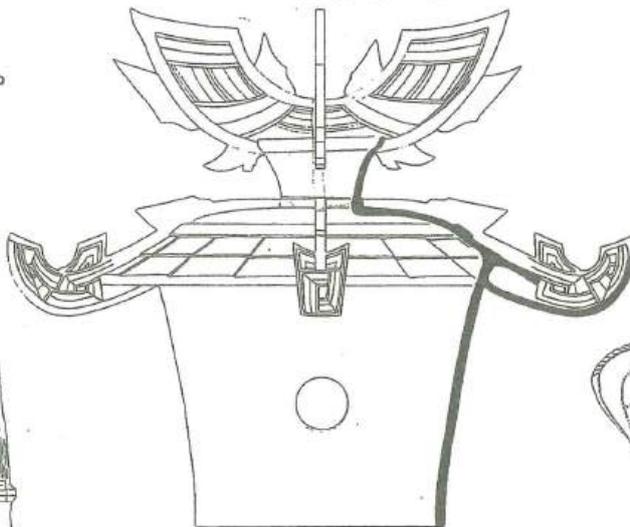
帽子(平井1号)



鞆(平井1号)



20 大刀(平井1号)



蓋(佐紀陵山):縮尺不同



短甲(高廻り1号)



船(高廻り2号)



図2-3 さまざまな形象埴輪(家・器財)

埴輪群像の意味を考える ⑥

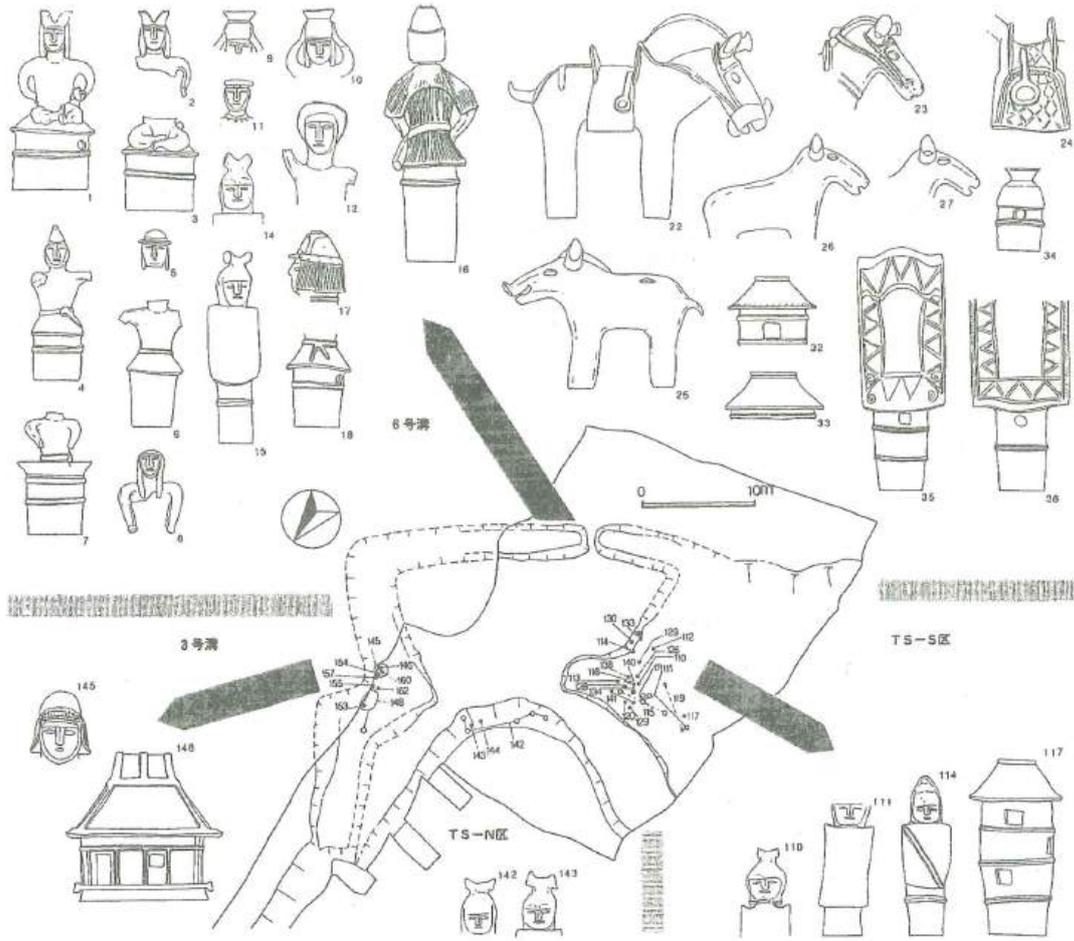


図3-4 埴輪樹立の位置(保渡田Ⅶ遺跡)

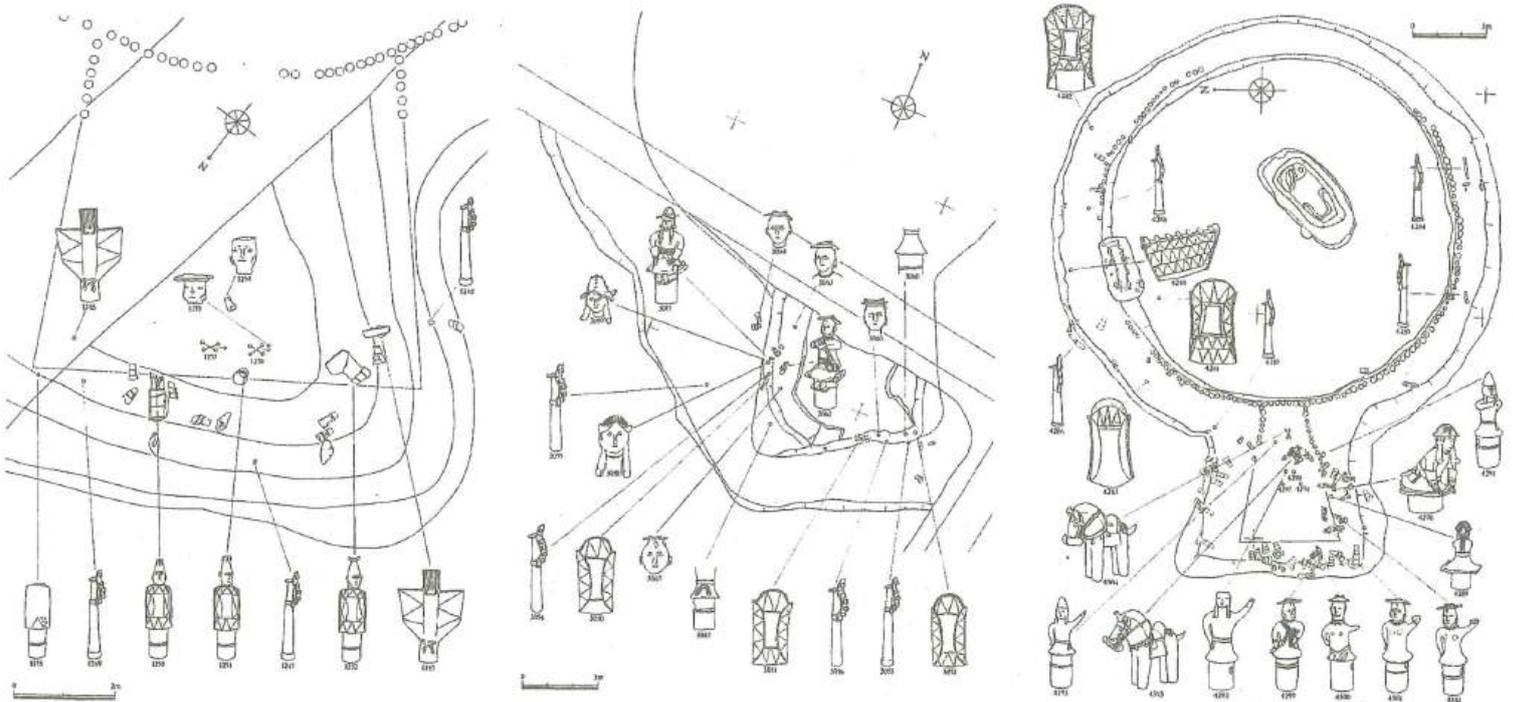


図3-5 埴輪樹立の位置(左:塚廻り1号、中:塚廻り3号、右:塚廻り4号)

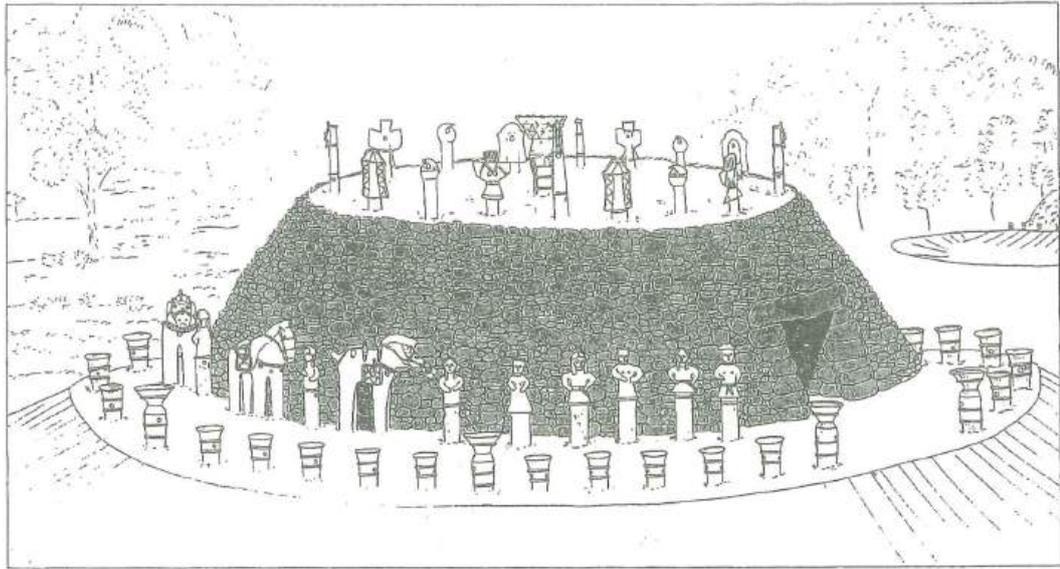


図3-6 埴輪樹立の位置(神保下條2号)

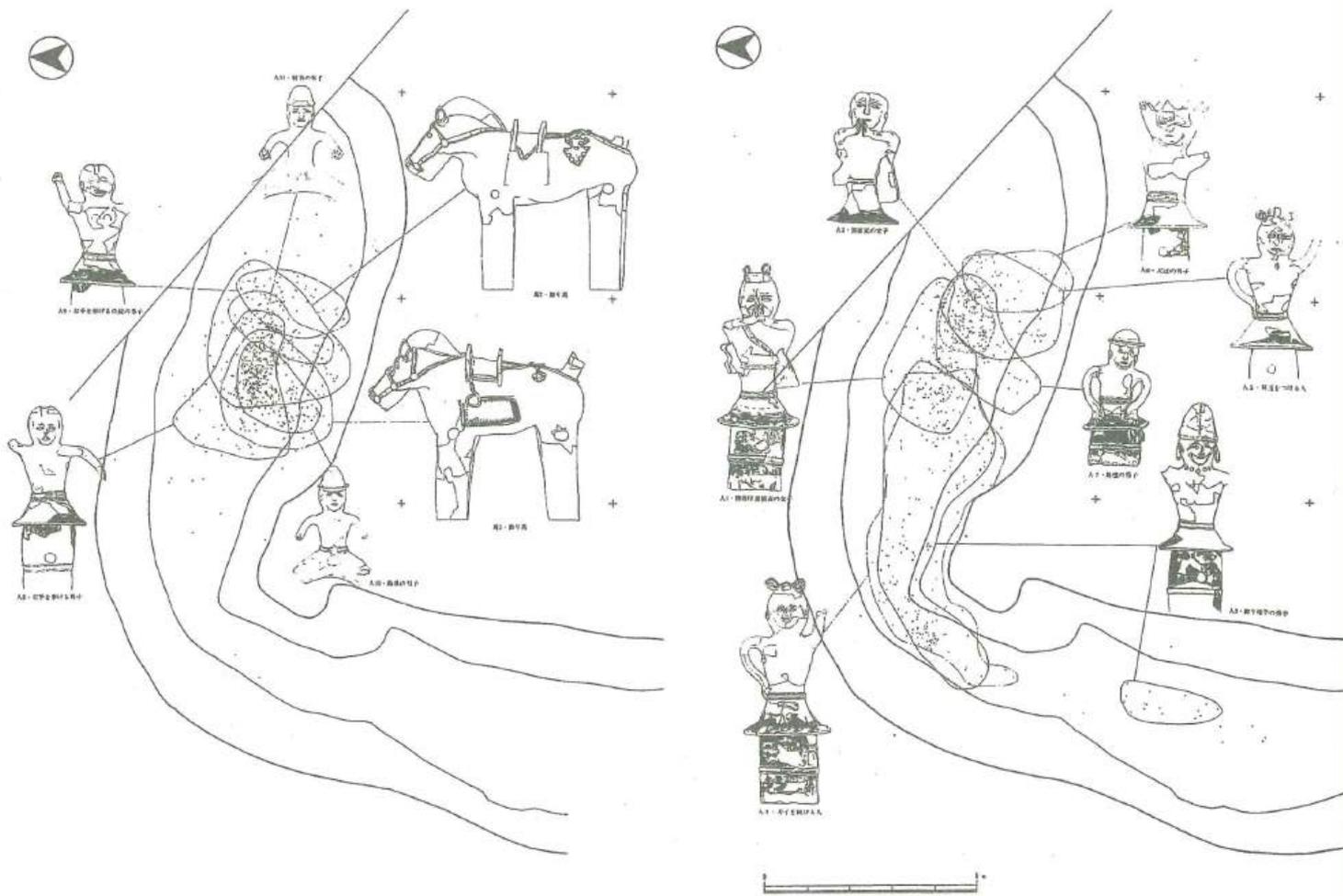


図3-7 埴輪樹立の位置(エジリ古墳)



図4-1 今城塚古墳の墳丘と周堤(平成13年度)

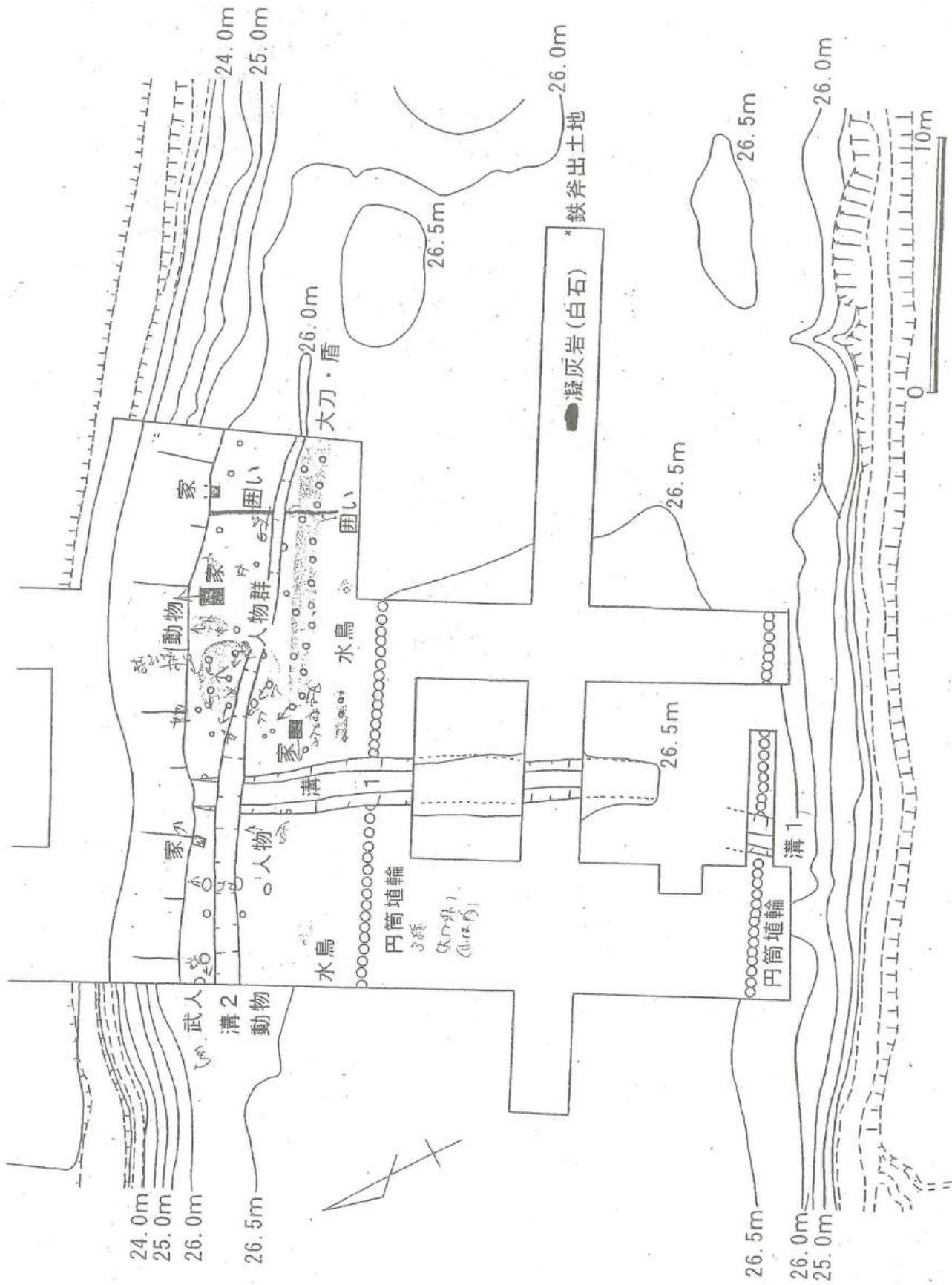


図4-2 今城塚古墳周堤の埴輪群(平成13年度)